

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	25220402	研究期間	平成25年度～平成29年度
研究課題名	「肥沃な三日月弧」の外側：遊牧西アジアの形成史に関する先史考古学的研究	研究代表者 (所属・職) (平成30年3月現在)	藤井 純夫（金沢大学・歴史言語文化学系・教授）

【平成28年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
	A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

（意見等）

本研究は、従来の都市、農村を中心とする西アジアの考古学が、今まで研究対象としてこなかった古代の内陸遊牧世界を数千年にわたる規模で明らかにすることを目的としており、考古学だけでなく歴史学においても画期的な研究と言える。サウジアラビア及びヨルダンでの遺跡調査、研究発表ともに着実に進んでおり、海外での評価も高い。

研究進捗状況報告書には、今後多くの調査が予定され、研究発表も更に本格化されるとあり、当初目標達成のためになすべきことは残されているが、昨今の政情に関する不安以外は研究専念の環境も整えられていることから、今後の成果が見込まれる。

膨大なデータを解析した後、従来の都市、農村を中心とする西アジア考古学の知見と本研究の成果を総合することによって、新たな古代史を描く成果が出ることを期待する。

【平成30年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	ヨルダンとサウジアラビアの政情が予断を許さない中、計20回に及ぶ広域遺跡調査をほぼ予定どおりに実施し、その結果を時系列順に設定した3つの課題に沿って整理した結果、家畜化から遊牧部族社会成立に至る5千年に及ぶ遊牧西アジアの形成過程を、定住遺跡からの間接的データではなくダイレクトな調査データに基づいて包括的かつ具体的に見通すことに成功している。